

VIII. ヤコブ



ヤコブの神は、その祖父アブラハムの神です。敬虔であるということは、世代から世代へと受け継がれるものです。しかし、アダムとエバの罪(創3章)の結果、ほぼ霊的な重力の法則のように、自然で下向きの劣化というものが常にそこにあるかのように思われることも確かです。ヤコブはこのことを証明してくれています。というのも、彼のうちに祖父アブラハムの信仰が宿っているという事実は明白であるにもかかわらず、信仰が弱くなっていること、少なくとも神の霊に従って歩むこと(すなわち、信仰)と肉に従って歩むこととの間に非常に大きな衝突が見られるからです。

ヤコブはこの両者が興味深い形で組み合わされた人物でした。彼の内に見られるのは、アダムの性質の支配が、自己探求、欺き、巧妙さ、そして祈りの欠如という方向に曲がった形で出てきているということです。同時に、墮落してしまった性質の表面にある固い部分にあって今にもそれを突き破って出てきそうなもののように見られるのが、唯一まことの神への揺るぎない信仰であり、その約束に対する信頼です。ヤコブが、自分自身の強さに頼ること、すなわち自分自身の才能に頼ることを、神に全てを明け渡して従うことより自然で簡単な生き方だと見ていたことは明らかです。ところが、置かれた状況からのプレッシャーが強くなると、主電源が停電してしまったときの補助的な発電機のように信仰が機能し始めるのが、彼の大きな特徴です。なにより、ヤコブには神に向けられた心があり、必要な状況になると、自分の信仰に十分な報いがいただけるまで、祈りにおいて神にしがみつくといい頑固さがありました。そういうわけで、祈らないことで、罪深い肉の性質がその歩みの中に、巧妙な形で、また破壊的な形で現れてくることになるという点を信じるに十分な根拠がある一方、祈ろうとついに決心した際には、祈りのゆえに、その肉の性質が絡みついてくるところから逃れることができ、誰もが得たいと思うような霊的な状態に到達することができたのです。

ヤコブが神と交わりを持っている例として早い時期のものは、創世記28章に見ることができます。ここに至るまでに、ヤコブは既に、かなり人の道から外れたことをしてきています。父をだまし、兄からは長子の権利を奪い取っています。そして、この場面では、兄エサウの怒りを避けるためにハランへと逃げているのです。そこはベテルという場所でした。しかし、肉の性質に基づくそのような逃避行であったにもかかわらず、神はそれを越えてヤコブの心をご覧になり、さらなる高みにおいてご自分の目的が達成されることを見ておられました。神は夢の中でヤコブを訪れ、彼がアブラハム契約の成就に直接に関与することになるということをお語りになりました。その結果、ヤコブは祈り、誓願の形で、神のお約束に対する感謝を表現しています。

それからヤコブは誓願を立てて言った。「神が私とともにおられ、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る着物を賜り、無事に父の家に帰らせてくださり、こうして主が私の神となられるなら、石の柱として立てたこの石は神の家となり、すべてあなたが私に賜る物の十分の一を必ずさげます。」(創世記28:20-22)

神に誓願を立てるということは、しばしば祈りの一部をなすところとなり、誓う者はその誓いに深刻な義務を負うことになります。「あなたが神に祈れば、神はあなたに聞き、あなたは自分の誓願を果たせよう」(ヨブ 22:27。また民 30:2、伝道 5:4-5 も参照)。

ヤコブの最も優れた祈りは、命を脅かされるという最大のストレスを抱える中で生まれました。何年も家族から離れて過ごした後で、生まれ故郷、一族のもとに帰るよう神からの命令をいただいていたとはいえ、彼は恐れのおそろしい影響下に落ちてしまっていました。エサウは命だけは助けてくれるだろうか。恐れと失意にほぼ圧倒されながら、ヤコブは人々や羊や牛やらくだの群れを二つに分け、エサウに襲いかかられながらも一部は逃げられるようにしました。

そうしてヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする』と仰せられた主よ。私はあなたがしもべに賜ったすべての恵みとまことを受けるに足りない者です。私は自分の杖一本だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、二つの宿営を持つようになったのです。どうか私の兄、エサウの手から私を救い出してください。彼が来て、私をはじめ母や子どもたちまでも打ちはしないかと、私は彼を恐れているのです。(創世記 32:9-10)

ヤコブの恐れはもっともなものでした。兄エサウは、武装した4百人の人々を連れて、行く手に迫ってきていたのです。この兄こそ、ヤコブがだまし、長子の権利と祝福の両方を奪った兄でした。恐れというのは恐ろしいものです。それは人の一番の核となる部分に噛みつきます。眠りを奪い、思いを焼き尽くそうとします。主に愛された弟子ヨハネは次のように書きました。「なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです」(I ヨハネ 4:18)。そしてさらにつけ加えるべきは、恐れは常に、問題を大きくしてしまうものだという事です

恐れはどのように取り扱うべきでしょうか。ヤコブの例に学んでみましょう。彼は祈りました。そしてその祈りは実に模範的な祈りとなっています。まず彼は、神がどのような方であることを述べています。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ」というわけです。そして、自分に対する神の目的を語ります。「かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする』と仰せられた神よ」とある通りです。そして次に、神の素晴らしさと祝福に対して自分がそれに値しない者であることを語ります。「私はあなたがしもべに賜ったすべての恵みとまことを受けるに足りない者です」。最後に、自分の願いと恐れについて語ります。「私の兄、エサウの手から私を救い出してください。…私は彼を恐れているのです」。

ヤコブはただ祈るだけでは満足しませんでした。彼は自分と兄との関係のほつれを修復するためにあらゆる力を注ぎ込みました。しかし、兄との間に平和を築くべくできる限りのことをしても、彼の内には依然、まだ確かではないという思いが深く根づいており、究極の問題が兄ではなく自分自身であるという意識が生まれてきていました。自らの真の状態を認めなければならないというのは、なんと苦痛に満ちた体験でしょうか。そのような気づきと苦痛は、ただ神によってのみ静められるものです。「ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した」(創 32:24)。

ヤコブが格闘した男とは何者だったのでしょうか。ヤコブはすぐに気づきます。「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」(創 32:30)。ヤコブのこの体験をはるか後の時代に振り返ったホセアは、同じことを語っています。「彼は御使いと格闘して勝ったが、泣いて、これに願った。彼はベテルで神に出会い、その所で神は彼に語りかけた。主は万軍の神。その呼び名は主」(ホセア 12:4-5)。

単純に言えることは、ヤコブは神と格闘したのだということです。理由を見きわめるのは難しいことではありません。ヤコブは神の祝福を求めていましたが、同時に、このヤコブこそ、神がまさにその悲痛な願いを尊重することのできない理由にほかなりませんでした。格闘は一晩にわたりました。ヤコブは一晩中、「私を祝福してください」と叫びました。神は一晩中、「おまえの名前は何か」と応答しました。肉なる性質とは弱くもあり強くもあるものです。弱さとは、神の御前にひれ伏すことができず、死ぬことができません。強さとは、あくまでも生きることを主張します。死ぬこと、とりわけ自らの罪深い、肉の性質に満ちた自己に死ぬということは、簡単なことではないのです。

「あなたの名は何というのか」。神はなぜ、そこまでこだわらなければならなかったのでしょうか。この格闘はなぜ、一晩にわたって続けられなければならなかったのでしょうか。神は彼の名前をご存じなかったのでしょうか。もちろん、ご存じでした。しかし、名前を認めるということは、問題の全体を白日の下にさらすということでした。すなわち、ヤコブ本人そのものであり、嘘つき、横取りする者、欺く者という問題です。ヤコブは、自分が神からの祝福にふさわしい者でないこと、自分が取り扱われなければならないという必要を認めることはできていました(創 32:10)。しかし、そうであっても、全能の神の御前に自らを取り繕うような覆いを身にまとい、完全な裸で現れなければならなかったということは、いかに徹底して身を低くさせられる体験だったことでしょうか。

ヤコブの肉なる性質が降伏し、降伏の告白がなされたのは、神が抵抗するその肉の性質を無になさった後のことでした(創 32:25)。「私はヤコブです」・・・ついに、頑固に闘う者が認めたのです。これこそ神が求めておられたものの全てでした。これにより、神の祝福の扉が全開になったのです。ヤコブがついに自分が何者であるかを告白したことは、彼が神の望んでおられる姿に変化するうえで鍵となることでした。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ」(創 32:28)

祈ること、格闘することによって、ヤコブは勝利を収めました。神によって勝利を与えられた者であり、王子である、イスラエルとなりました。人間としての自らの性質を理解し、この古い性質に対する新しい性質を、神がくださるがままお委ねすることにより、兄との間にあったヤコブの問題もまた、解決に至りました。この原則は今もお生きています。私たちが祈りの中で神のみもとに持っていく外的な問題は、時として、内面の変化という奇跡によって答えられるという原則です。

ヤコブは、このペヌエルの体験を忘れることは決してありませんでした。彼は完全に変わりました。何年も後のこと、彼は、自分が超自然的な体験をしたもう一つの場所であるベテルに戻り、そこで神に対する祭壇を築くことにより、神が決してお見捨てになることのない方であることに感謝を表しています(創 35:3)。



第1章

族長たちとその時代の人々の祈り

ヤコブ



Check!

- 『聖書の祈りが私の祈りになる』（旧約編） 69～76ページ
- 主な引用箇所 創世記28章、32章9～11節・22～32節

? 質問

- 1 ヤコブにはアダムの性質がどのように見られましたか？また祖父アブラハムの信仰と比べると彼の状態はどのようなものでしたか？（70ページ参照）
- 2 ヤコブの信仰と祈りはどのようなものでしたか？（70～71ページ参照）
あなたにとって信仰は主電源ですか、それとも補助電源だと思いますか？
- 3 ヤコブはなぜ恐れていたと思いますか？その時彼はどのように祈りましたか？（72～73ページ参照）
あなたが恐れを感じる時にはどのように祈ったらよいと思いますか？
- 4 なぜ神はヤコブと格闘したのですか？格闘の結果、ヤコブにどのような変化が起こりましたか？
（72～75ページ参照）あなたは恐れやプレッシャーを感じる時に、祈りにおいて神と格闘したことがありますか？その結果、どんなことが起こりましたか？
- 5 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



主よ。定期的にあなたを思いめぐらす時間を一日の中に持たせてください。継続的な祈りを問題解決の突破口にすることができますように。